メタノイア[1]の概念に関する考察

―― ルカ神学におけるメタノイア理解の予備的考察 ――

木原　桂二

第一節　問題設定

ルカ神学を考察するわれわれの目的は、ルカ神学における「神の救済行為」と「信仰者の倫理」の関係を明らかとし、現代に生きる信仰者の倫理を考える手掛りを提供することにある。この考察を開始する初期の段階において、まずルカ文書[2]におけるメタノイアの語の重要性について触れておく必要があるだろう。

ルカ文書におけるメタノイアが重要なキーワードであることは、その使用回数から示すことができる。μετάνοια / μετανοεῖν の使用回数は、共観福音書の中でもルカが最も多い。名詞 μετάνοια は、ルカにおいて 5 回現れるのに対して、マルコでは 1 回、マタイでは 2 回にすぎない。さらに動詞 μετανοεῖν の場合は、ルカにおいて 9 回現れるの対して、マルコでは 2 回、マタイでは 5 回という結果になる。加えて使徒行伝の場合も、名詞で 6 回、動詞で 5 回用いられているから、ルカ文書全体の傾向としてメタノイアが重視されていると言える[3]。

しかしただ単に使用回数の問題だけではなく、メタノイアはルカ文書の使信自体にも大きな影響を与えている。たとえばマルコ福音書や Q のテキストと比較検討した場合、メタノイアに関する言及が、ルカにおいては意図的な編集作業の結果として付加されているからである（ルカ 5:32; 15:1－7 参照）。また使徒行伝には、「（神が）メタノイアを与える（δοῦναι μετάνοιαν）」（行伝 5:31; 11:18 参照）という救済論的な表現も見受けられる[4]。われわれは、これらの編集や表現の意味について考察を試みたい。

ただし本論は、その表題が示すようにメタノイアの歴史的概念を考察するものであり、ルカ文書のテキストを分析するための予備的考察の段階にある。われわれは、この考察を通してメタノイアの語が所持している幅広い概念を確認し、今後のルカ研究

（1）以下、μετάνοια / μετανοεῖν の語群を示す場合で、特に名詞・動詞の区別を必要と判断しない場合には「メタノイア」とカタカナ表記する。

（2）以下、「ルカ福音書」「使徒行伝」の二著作を合わせて「ルカ文書」と表記する。

（3）ルカ文書におけるメタノイアの重要性と若干の研究史については、G.D.Nave, *The Role and Function of Repentance in Luke-Acts*, Leiden: Society of Biblical Literature, 2002, pp.3－5 を参照されたい。

（4）δοῦναι μετάνοιαν の表現に類似した「救いの知識を与える（δοῦναι γνῶσιν σωτηρίας）」（ルカ 1:77）との関連性も考慮に入れるならば、救済論的意義がより明確になるであろう。

に生かしたいと願っている。

第二節　メタノイアの概念の考察

１．ギリシア的概念について

メタノイア（μετάνοια）は、前置詞 μετά（「～のあとに」「～と共に」「～に対して」；接頭辞として「移動」「変化」を表す）と、名詞 νοῦς（「知能」「思考」「理性」「心」）の合成語である。つまり、メタノイアのギリシア語的意味としては「理性（思考）の転換（変化）」であって、この語自体に道徳的・倫理的、あるいは宗教的価値判断が含まれているわけではない。以下、ThWNT（Behm）の見解を手がかりに、意味の分類を示しておきたい[(5)]。

ａ）「後で認識すること」（場合によっては「手遅れ」という意味が含まれる）。LXX の箴言 20:25 にこの用例を見ることができる。

ｂ）「人の考え（νοῦς）を変えること」。他にも「別の視点を受入れること」「人の感情が変わること」といった意味もある。

ｃ）「後悔する」「痛恨に感じる」「悔いる」。

上記ｃ）のように、「感情の動き」もメタノイアの語で表現されることが分かる。ところが新約聖書の諸翻訳において、この訳語が用いられるのは稀である。文脈によっては採用できる訳語なのだが、ほとんどの場合「悔改め」に類する訳語に統一されてしまっている。しかし、われわれは感情の変化を表す用法についても考慮に入れることにしたい。

２．ヘブル的概念の考察

（１）ヘブル語 שוּב とメタノイアの関係（メタノイアの行為者が人間である場合）

メタノイアのヘブル的概念を考察するためには、LXX の用例を視野に入れなければならない。この点に関して ThWNT（Würthwein）は「帰る」「立ち帰る」などを意味するヘブル語 שוּב との関連性を指摘している[(6)]。つまり、主（神）に立ち帰ると

（５）Behm, ThWNT IV, pp.974－975. さらに Nave, op.cit., pp.39－69が、古典／ヘレニズム・ギリシア文学の用例についてかなり詳しい考察を行っている。そこに示されている概念を一覧表にまとめれば、Behm のものと変わりはない。しかし Nave の場合は、古典／ヘレニズム・ギリシア文学におけるメタノイアのキリスト教文献への影響を論証しようと試みつつ、同時にキリスト教独自の見解をも明らかにしようとしている点で新しい。特に、メタノイアに感情的変化の概念があることについての積極的な考察が試みられている。

（６）Würthwein, ibid., pp.985－987.

いう宗教的改心がメタノイアと関連づけられるというのである。

これは一見単純明快な説であるが、しかし実際にはかなり複雑な事情がある。なぜなら ThWNT も指摘しているように、LXX は常に שׁוּב を ἐπιστρέφω（-ομαι）または ἀποστρέφω（-ομαι）を訳語として用いているからである。一方、μετανοέω が שׁוּב の訳語として用いられることはなく、נִחַם の訳語として 14 回現れる[7]。שׁוּב と נִחַם の基本的意味が異なることに合わせ、LXX が両者を訳し分けていることを考えると、この説は有力な根拠を持たないように思われる[8]。

しかし ThWNT はメタノイアと שׁוּב の関係性の根拠を示すために、旧約聖書の用例を挙げている（エレ 4:28; 出 32:12; エレ 8:6 + 31:18ff; 38:18f; イザ 46:8）[9]。さらに ThWNT は、シュンマコス訳（紀元 2 世紀末）に שׁוּב を μετανοέω と訳している箇所が 6 例あることを指摘している（イザ 31:6; 55:7; エレ 18:8; エゼ 33:12; ホセ 11:5; ヨブ 36:10）[10]。これらの箇所は、メタノイアの意味が歴史的過程の中で変化していることを示しているのである。ただし、これらの用例は新約時代のメタノイア理解を得るための有力な根拠ではない。

そこでわれわれは、この問題を考えるための有力なテキストとして、ニネベの人々がメタノイアした（μετενόησαν）というルカ 11:32 の表現に注目したい。通常この箇所は、ニネベの人々が「悔改めた」と訳されている。だが、このエピソードの原型であるヨナ 3:10 の MT において、ニネベの人々は悪の道からシューブしたと表現されているのである（שָׁבוּ מִדַּרְכָּם הָרָעָה）。しかも MT にある שָׁבוּ は LXX で ἀπέστρεψαν と訳されている。それゆえルカ 11:32 と異なり、LXX の段階においてシューブはメタノイアと訳されていなかったことが分かる。

それでは一体、どのような過程を経てルカ 11:32 は LXX と異なるギリシア語表現をするようになったのだろうか。ルカ 11:32 の原資料が Q であり、並行箇所のマタイ 12:41 も同様にメタノイアの語が用いられていることから、その要因を Q の著者（編者）に認めることができる。あるいは Q が何らかの資料を用いていたとしても、Q の著者（編者）がその解釈を受け継いだ事実に変わりはない。とにかく福音書成立に近い段階で、メタノイアは שׁוּב の意味に理解されていたのである。

（7）Ibid., pp.985－986.

（8）H.J.Sellner, *Das Heil Gottes: Studien zur Soteriologie des lukanischen Doppelwerks*, Berlin: Walter de Gruyter, 2007, p.147は LXX の訳語を根拠として、μετάνοια / μετανοεῖν を שׁוּב に関連づける解釈を退けている。しかしわれわれは、語の意味が歴史的な過程を経て変化することを考慮すべきであると考える。その点で、ThWNT における Würthwein の仮説は傾聴に値すると判断したい。

（9）Würthwein, op.cit., p.986.

（10）Ibid., p.986.

（2）ヘブル語 נָחַם とメタノイアの関係（メタノイアの行為者が神である場合）

LXX においてメタノイアは、ヘブル語 נָחַם の訳語として現れる（神への「立ち帰り」を意味する שׁוּב は、ἐπιστρέφειν の訳語が用いられていることが多い。以下③④⑨の下線部参照）。さらに預言書における用法を見ると、いわゆる従来の「罪の悔改め」という解釈が成り立たない文脈でメタノイアが用いられていることも分かる。以下に主な用例を、LXX 本文[11]と試訳によって示すことにしたい。

①アモス書 7 章 3 節

μετανόησον κύριε ἐπὶ τούτῳ καὶ τοῦτο οὐκ ἔσται λέγει κύριος

このこと※を思い直して下さい、主よ。「このこと※は起こらない」と、主は言われた。

※「このこと」は文脈上、神が下そうとしている裁きの出来事を指し示している。以下②も同様。

②アモス書 7 章 6 節

μετανόησον κύριε ἐπὶ τούτῳ καὶ τοῦτο οὐ μὴ γένηται λέγει κύριος

このことを思い直して下さい、主よ。「決してこのことは起こらない」と、主は言われた。

③ヨエル書 2 章 13 節

καὶ διαρρήξατε τὰς καρδίας ὑμῶν καὶ μὴ τὰ ἱμάτια ὑμῶν καὶ ἐπιστράφητε, πρὸς κύριον τὸν θεὸν ὑμῶν ὅτι ἐλεήμων καὶ οἰκτίρμων ἐστίν μακρόθυμος καὶ πολυέλεος καὶ μετανοῶν ἐπὶ ταῖς κακίαις

そして、お前たちの衣服ではなく、お前たちの心を引き裂け。お前たちの神、主に立ち帰れ。彼（主）は恵み深く、慈悲に満ち、怒ること遅く、慈愛に富み、（下すべき）災いを思い直すからである。

④ヨエル書 2 章 14 節

τίς οἶδεν εἰ ἐπιστρέψει καὶ μετανοήσει καὶ ὑπολείψεται ὀπίσω αὐτοῦ εὐλογίαν θυσίαν καὶ σπονδὴν κυρίῳ τῷ θεῷ ἡμῶν

誰が知っているのか。彼（神）が立ち帰り、思い直して祝福を彼の後に残されるのを。犠牲と葡萄酒の供え物を、あなたがたの神、主のために（残されるのを）。

（11）A.Rahlfs (ed.), *Septuaginta*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1935. 以下、特に断りのない限り LXX からの引用は同書による。

⑤ヨナ書 3 章 9 節

τίς οἶδεν εἰ μετανοήσει ὁ θεὸς καὶ ἀποστρέψει ἐξ ὀργῆς θυμοῦ αὐτοῦ καὶ οὐ μὴ ἀπολώμεθα

誰が知っているのか。神は思い直し、彼（神）の激しい怒りが取り去られ、われわれは破滅を免れるかもしれない。

⑥ヨナ書 3 章 10b 節

καὶ μετενόησεν ὁ θεὸς ἐπὶ τῇ κακίᾳ ᾗ ἐλάλησεν τοῦ ποιῆσαι αὐτοῖς καὶ οὐκ ἐποίησεν

そして神は、彼らになすと語った災いを思い直し、彼（神）は（災いを）なさなかった。

⑦ヨナ書 4 章 2 節

σὺ ἐλεήμων καὶ οἰκτίρμων μακρόθυμος καὶ πολυέλεος καὶ μετανοῶν ἐπὶ ταῖς κακίαις

あなたは恵み深く、慈悲に満ち、怒ること遅く、慈愛に富み、（下すべき）災いを思い直す方である。

⑧ゼカリヤ書 8 章 14 節

διότι τάδε λέγει κύριος παντοκράτωρ ὃν τρόπον διενοήθην τοῦ κακῶσαι ὑμᾶς ἐν τῷ παροργίσαι με τοὺς πατέρας ὑμῶν λέγει κύριος παντοκράτωρ καὶ οὐ μετενόησα

なぜなら、全能者なる主がこのように言われるからである。私は、あなたがたの父祖たちが私を怒らせたことによって、あなたがたに災いを（下すことを）考えた。そして私は、（それを）思い直さなかったと全能者なる主が言われる。

⑨エレミヤ書 18 章 8 節

καὶ ἐπιστραφῇ τὸ ἔθνος ἐκεῖνο ἀπὸ πάντων τῶν κακῶν αὐτῶν καὶ μετανοήσω περὶ τῶν κακῶν ὧν ἐλογισάμην τοῦ ποιῆσαι αὐτοῖς

そして、もしその民が彼らのあらゆる悪から立ち帰るなら、私がそれらに対してなそうと考えていたことを思い直すであろう。

⑩エレミヤ書 18 章 10 節

καὶ ποιήσωσιν τὰ πονηρὰ ἐναντίον μου τοῦ μὴ ἀκούειν τῆς φωνῆς μου καὶ μετανοήσω περὶ τῶν ἀγαθῶν ὧν ἐλάλησα τοῦ ποιῆσαι αὐτοῖς

そして、もし彼らが私の目に悪と見えることを行い、私の声に聞かないなら、私がそれらに対してなそうと告げた良き事を思い直すであろう。

以上の用例が示すように、裁きを下そうとする神の意志が変更される表現にメタノイアの語が用いられる場合がある[12]。必ずしもメタノイアは、罪を悔改める人間の行為を表すための術語ではなかったのである。

ところで「神がメタノイアする」という表現を、われわれはどう理解したら良いのだろうか。神が一度は下すと宣言した人間への災いの撤回は、極めて重大な救済行為であると考えられる。それゆえ、ただ単に神が思い直して計画を変更したということが示されているとは言えない。やはり、メタノイアに救済論的意味が込められている可能性を考慮すべきであろう。同時に、この語の意味をギリシア的な概念だけで捉えるのではなく、ヘブル語の影響も合わせて考慮する必要がある。

LXX のメタノイアはヘブル語 נִחַם の訳語として現れる。まずは נִחַם の意味を確認し、その上で両語の関連性について考察を試みたい。BDB は נִחַם の第一の意味として、*be sorry, moved to pity, have compassion* の訳語を示している[13]。その項目の中で、エレ 15:6; 詩篇 90:13（LXX=89:13）; 士師 2:18; 21:6, 15 が用例として挙げられており、いずれの箇所も主な日本語訳聖書では「あわれむ」といった訳語が用いられている[14]。さらに BDB は第三の意味として *comfort oneself, be comforted* の訳語を提示している。

そこでわれわれは、נִחַם とその訳語 μετανοεῖν の間に、若干意味の相違があることに気づかされる。ThWNT の分類によれば、μετανοεῖν は「後悔する」「痛恨に感じる」「悔いる」といったように、心の痛みや苦しみを表現する語として用いられることがある[15]。それに比べて、ヘブル語 נִחַם は他者の痛みや苦しみに共感するという意味での「あわれむ」、あるいは他者を癒しに導く「慰める」の意味にも用いられるのである。もう少し詳しく述べると、μετανοεῖν が感情を持つ人自身の気持の変化に留まっているのに対し、נִחַם には他者との関係概念がある。

しかし、このような違いは実際、それほど大きいものとは言えないであろう。なぜなら感情の変化は、他者との関連性を持つこともあるからである。たとえばギリシア語の σπλαγχνίζομαι は直訳すれば「腸が動く（痛む）」という意味であるが、腸が動くことによって生じる痛みは他者の痛みへの共感と理解され「あわれむこと（*to feel compassion*）[16]」と解釈されている（ルカ 7:13, 10:33, 15:20 参照）。このように、心

（12）Nave, op.cit., pp.113－114が指摘するように、神の意志が変わらないことを示す用例も多い（サム上15:29; エレ4:28; 20:16; ゼカ8:14; 詩篇109［110］:4; 民23:19）。
（13）BDB, pp.636f.
（14）たとえば口語訳聖書（日本聖書協会、1954年）。
（15）新約聖書でこの訳語が用いられるのは極めて稀である（LUT と ZB の Lk17:3, 4や口語訳の使徒8:22参照）。しかし古典ギリシア語の文献には多数用例がある。Cf. ThWNT IV, pp.973f.
（16）*An Intermediate Greek-English Lexicon founded upon the 7th edition of Liddel and Scott's Greek-English*, 1st ed., Oxford, 1889, p.740.

の痛みを表す μετανοεῖν がヘブル語 נָחַם のような「あわれみ」の感情を呼び起こす意味であるとしても、それほど的外れにはならないであろう[17]。

さらに、μετανοεῖν とほぼ同じ意味内容を表す μεταμέλεσθαι[18]（μετανοεῖν と同様、LXX において נָחַם の訳語として用いられる場合が多い）が、「あわれむ」の意味で用いられる例が存在する。エレミヤ書 20 章 16 節のギリシア語原文は ἔστω ὁ ἄνθρωπος ἐκεῖνος ὡς αἱ πόλεις ἃς κατέστρεψεν κύριος ἐν θυμῷ καὶ οὐ μετεμελήθη である。これを訳せば「その人は、あわれみを受けずに滅ぼされた、あの町々のようになれ」となる。

また、同じ μεταμέλεσθαι がエゼキエル書 14 章 22 節では「慰められる」の意味として用いられていることを指摘できる。当該箇所のギリシア語原文は καὶ μεταμεληθήσεσθε ἐπὶ τὰ κακά ἃ ἐπήγαγον ἐπὶ Ιερουσαλημ πάντα τὰ κακὰ ἃ ἐπήγαγον ἐπ’ αὐτήν であり、「そしてあなたがたは、私がエルサレムにもたらし、私がそこにもたらした全ての災いについて慰められる」と訳すことができる。καὶ μεταμεληθήσεσθε は וְנִחַמְתֶּם の訳語なので、やはり נָחַם がギリシア語の意味に影響を与えていることが分かる。

最後に名詞形であるが、ホセア書 11 章 8 節が μεταμέλεια を「あわれみ」の意味に用いていることが分かる。ギリシア語原文は、μετεστράφη ἡ καρδία μου ἐν τῷ αὐτῷ συνεταράχθη ἡ μεταμέλειά μου であり、「私の心は私のうちで向きを変え、私のあわれみは激しく駆り立てられた」と訳すことができる。ἡ μεταμέλειά μου は נִחוּמִי[19]の訳語であるから、やはりここにもヘブル語の影響を認めることができるであろう。ただしこれらの用例は、あくまでも μεταμέλεσθαι の語群についてのものであるから、ヘブル語 נָחַם と μετανοεῖν の関係を直接裏づけるものではない。重要な傍証として考慮することだけが許されるであろう。

3．メタノイアの概念の整理

メタノイアのギリシア的概念と、LXX からの影響によるヘブル的概念について考察した結果を、以下の表にまとめておきたい。

（17）Nave, op.cit., p.113は、メタノイアに נָחַם のような感情的意味が込められていることを認めている。その点で、ἐπιστρέφω / ἀναστρέφω / ἀποστρέφω などとは明確に区別されるという。われわれも、この見解に同意できる。

（18）ThWNT は、「悔い」などの感情を表す μετανοεῖν が μεταμέλεσθαι と同義であることを指摘している。Cf. ThWNT IV, p.973.

（19）BHS[4]の校訂者は、נִחוּמִי を רַחֲמִי と読み替えるように提案している。ペシッタとカイロ・ゲニザの写本断片の証言が根拠として示されているが、μεταμέλεσθαι の語群が נָחַם の訳語として用いられる傾向からすれば、読み替えの必要はないと思われる。Cf. BHS[4], p.1005.

《メタノイアの概念分類表》

分類記号	概念の種類	転換／変化の種類	訳　例
A	ギリシア的	思考	「後で考える」
B－①	ギリシア的	理性・思考・心	「思い直す」「思いを変える」
B－②	ヘブル的（שׁוּב の影響）	全人格	「立ち帰る」
C－①	ギリシア的	感情（個人的）	「痛恨に感じる」「悔いる」
C－②	ヘブル的（נִחַם の影響）	感情（共感的）	「あわれむ」「痛みに共感する」「慰める」

第三節　結　論

本論において考察したように、メタノイアには意味の多様性が認められる。メタノイアは、人の「思考」「理性」「心」「感情」、さらには「全人格」の転換や変化を表現する場合に用いられる。さらには、神の意志や感情の変化を表す場合にも用いられる。ところが新約諸文書が翻訳される際、このような多様性は無視されてきた。

たとえば多くの日本語訳でメタノイアは「悔改め」と訳されているため、「罪を悔いて行いを改める」という意味が、この語に込められているかのような印象を受ける。しかしメタノイアという語自体に「罪を」「行いを」という転換の内容が含まれているわけではない。LXX において、神が裁きを撤回する表現にメタノイアが用いられていることから言えるように、メタノイアは個人倫理的改心だけを表す術語ではないのである。しかもメタノイアとヘブル語 שׁוּב との関係を考慮に入れた場合、信仰者の転換すべき方向性を表す術語であると見なすことも可能である。

それゆえルカ文書のメタノイアの語を考察する場合には、次の箇所を重視する必要がある。まず、「メタノイアにふさわしい実（複数）」（ルカ 3:8）を挙げることができよう。この表現はもともと Q（マタイ 3:8 参照）に由来するものであるが、ルカは使徒行伝において「メタノイアにふさわしい行い」（26:20）と言い換えて、この表現を意図的に繰り返している。

おそらくルカはこの表現を強調することにより、メタノイアという行為ではまだ不十分であるという見解を示しているに違いない。メタノイアにふさわしい（ἄξιος）何らかの業（ἔργον）を、メタノイアした後に行うべきという主張が確認できるからである。つまりメタノイアは、信仰的行為の最終段階ではないばかりか、誰もがその意味を共通に認識できるほど具体的ではないのである。

さらに、「（神が）メタノイアを与える（δοῦναι μετάνοιαν）」（行伝 5:31; 11:18 参照）

という表現にも注目したい。もしもメタノイアを人間の悔改めの行為としてのみ捉えるのであれば、神がそれを与えるとする表現には違和感を覚える。しかし LXX の用例を考察したように、神がメタノイアの行為者であるとする表現は決して珍しいものではない。われわれはメタノイアの行為者を人間に限定するのではなく、文脈を踏まえた解釈を試みるべきであろう。

補論　七十人訳におけるメタノイアの用例について

第一節　考察の目的

LXX におけるメタノイアの用例については、すでに本論の中で考察を試みたが、ここでは他の参照すべき重要なテキストを取り上げることにする。なお日本語訳については、日本聖書学研究所編『聖書外典偽典 2 旧約外典Ⅱ』（教文館、1977年）を参照し、必要に応じて訳語に関する議論を展開した上で改訳を試みたい。

第二節　メタノイアに関する訳語の問題

1．マナセの祈りの考察

マナセの祈り 7 節には、神が人への災いを思い直す（メタノイア）との表現が見られる。内容的にヨエル 2:13; ヨナ4:2 に類似しているため、預言書の表現に影響されているものと思われる。ただしギリシア語写本 55 とウルガタには興味深い付加があり、ここにはメタノイアに関する重要な言及が見られるので、以下に検討を加えたい。

『旧約外典Ⅱ』はメタノイアに関する付加部分を「あなたに対して罪を犯した者たちに、悔改めと赦し（μετάνοιαν καὶ ἄφεσιν）[20]を約束なさいました」[21]と訳している。これを素直に読めば、「悔改め」は神によって約束されているものであるという解釈になる。しかし「悔改め」は人間の行為であるから、一般的には神の約束によって与えられるものとは捉えられないであろう。さらに言うと、「悔改め」の結果として「赦し」が与えられるとする場合、「悔改めと赦し」が併記されていることにも違和感がある。

しかもその問題は、後続の「罪人らに、救いに至る悔改めを（μετάνοιαν）定められました」[22]との表現にも見られる。果たして悔改めを定められたとは、一体どのよう

（20）A.Rahlfs (ed.), *Septuaginta*, Vetus Testamentum Graecum auctoritate academiae scientiarum Gottingensis editum vol.X, Psalmi cum Odis, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, ³1979, p.362.
（21）『旧約外典Ⅱ』、524頁。
（22）同上、524頁。

な事態を示す表現なのだろうか。前述の箇所同様、意味を捉えることが極めて困難である。

そこで、メタノイアを悔改めと訳す従来の解釈に批判を加えたい。すでにわれわれは、LXX におけるメタノイアの動詞形がヘブル語 נִחַם の訳語であることから、メタノイアにも נִחַם と同様「あわれむ／慰める」などの意味が込められている可能性を指摘した。もしもこの仮説が的を射ているとすれば、メタノイアの名詞形もヘブル語の意味を名詞化した上で「あわれみ」[23]「慰め」のように訳すことができるのではないかと思われる。

そこで 7 節を、以下のように訳出することを提案したい。なお網掛け部分は『旧約外典Ⅱ』を参考にしつつ、われわれの仮説にしたがってメタノイアを改訳した部分を示す。また必要に応じて、改訳した箇所前後の言葉遣いを若干修正していることを断っておく（以下、同様）。

> 主よ、あなたは、あなたの豊かな慈愛により、あなたに対して罪を犯した者たちに、あわれみと赦しを約束なさいました。そして、豊かな慈悲により、罪人らに、救いに向けたあわれみを決意されました（マナセ7［写本55による付加］）。

次に 8 節を検討したい。『旧約外典Ⅱ』は、この節を「……義人に対しては悔改めを設けられませんが、しかし、私、すなわち罪人には、悔改めを設けられました」[24]と訳している。だが、「悔改めを設けられ」という表現は不明瞭であり理解が困難である。ここでも 7 節の場合と同様、神が人間に「悔改め」を与えると解釈されているのであるが、そのように理解すると無理が生じることになる。8 節の場合も、われわれが提示する訳語を用いて、以下のような改訳を試みることができる。

> だから主よ、義しい者の神よ。あなたは、アブラハム、イサク、ヤコブ、すなわち、あなたに罪を犯さない者、すなわち義人に対してはあわれみを与えませんが、しかし、私、すなわち罪人には、あわれみを与えられました（マナセ 8）。

最後に 13 節の「あなたは、主よ、悔改めるものの神だからです」[25]という訳につ

(23) 日本語の「あわれみ」と英語の compassion には意味の相違がある。前者は「上の立場」からの視点（たとえば「かわいそうに思う」など）と理解されるが、後者の場合は、他者の痛みや苦しみに「共感する」と言える感覚がある。それを日本語で表現する場合、動詞であるなら「心を痛める」と言い表せるが、名詞になると適切な表現は見当たらない。とりあえず、ここでは「あわれみ」と訳しておく。
(24) 『旧約外典Ⅱ』、262頁。
(25) 同上、262頁。

いて検討したい。ここでも従来通りメタノイアが「悔改め」の意と解釈され、「悔改めるもの」という訳語が用いられている。一見、日本語的にはふさわしく感じられる。ところがマナセの著者の主張を慎重に読み取ってみると、それほど単純な話ではないことが理解できる。

本節冒頭の「私はあなたに乞い、求めます。私をゆるしてください。主よ、私をゆるしてください。私の不法のゆえに私を滅ぼさないでください」[26]という言葉が示すように、この詩の作者は神にゆるしを求めている。それゆえ、もしもゆるしを求める人間が神に向って「あなたは、主よ、悔改めるものの神だからです」と祈るならば、神の受容を自作自演することになってしまう。悔改める者を受容するかどうかは神の側の問題であって、祈る人間が決定する事柄ではないからである。実際、自分たちの悔改めを神の前に誇示する人々の偽善的態度が、ホセア書 5:15－6:3 において批判されているのである。

そこで本節のメタノイアについては、「悔いる」という感情の変化のみを示す訳語を用いて、以下のように改訳するのがふさわしいと考えたい。

> 私はあなたに乞い、求めます。私をゆるしてください。主よ、私をゆるしてください。私の不法のゆえに私を滅ぼさないでください。永遠に激怒して、私に対して悪を保たないでください。また、地の底の最も深い所で、私を罪に定めないでください。あなたは、主よ、悔いる者たちの神だからです（マナセ 13）。

2．ソロモンの知恵の考察

『旧約外典Ⅱ』はソロモンの知恵 11:23 を「総てのことがお出来になるので、あなたはすべての人を憐み人々の罪を見過ごして悔い改めに至らせる（εἰς μετάνοιαν）」[27]と訳している。しかし前置詞 εἰς を動詞のように訳すのは問題であろう。なぜなら、この文章の主動詞は「見過ごして（παροῤῥᾷς）」と訳されている言葉だからである。παροῤῥᾷς は「見過ごす（現在形）」とすべきである。さらにメタノイアについては、われわれの仮説にしたがって「慰め」と解釈し、以下のように改訳することを提案したい。

> あらゆることが出来るので、あなたはすべての人を憐み、慰めに向けて人々の罪を見過ごす（ソロモン 11:23）。

（26）同上、262頁。
（27）同上、44頁。

次に 12:10 では、「悔い改めの余地を（τόπον μετανοίας）与えた」[28]の訳語に関して問題が認められる。前項での「マナセの祈り」と異なり、ここでは神が直接メタノイアを与えるのではなく、その τόπος が与えられたとされている。果たして、その意味をどう解釈すればよいのだろうか。

『旧約外典Ⅱ』は「余地」と訳すことにより、人間に悔改めの機会が与えられたとの解釈を示しているように思われる。しかし τόπος は「機会」といったような時の概念を示す語ではなく、基本的には「場所」の概念を指し示す語である[29]。そう考えると、『旧約外典Ⅱ』の解釈は適切とは言えない。だが、それでもメタノイアが人間の行為としての「悔改め」を指し示しているとするならば、このような拡大解釈も止むを得ないことになる。それゆえ τόπος の意味を決定するためには、まずメタノイアの意味を考察する必要がある。

そこで、この問題は一旦保留した上で、12:19 を先に検討してみることにしたい。『旧約外典Ⅱ』は、当該箇所を「そしてあなたの子らに希望を与え、罪の悔い改めに導こうとされた（καὶ εὐέλπιδας ἐποίησας τοὺς υἱούς σου ὅτι διδοῖς ἐπὶ ἁμαρτήμασιν μετάνοιαν）」[30]と訳している。だが、ここでメタノイアが人間の行為としての「悔改め」と解釈されているため、訳語に無理が生じていることが確認できる。

本来「与えること」を意味する διδοῖς が、「導こうとされた」と訳されているのは問題である。さらに「罪の悔い改めに」という表現について指摘するならば、「諸々の罪（ἁμαρτήμασιν）」は与格なので「諸々の罪に対して」とすべきであるし、「メタノイア（μετάνοιαν）」は対格なので「メタノイアを」とすべきであろう。そこでメタノイアの解釈を保留した上で試訳すると、「なぜなら、あなたは諸々の罪に対してメタノイアを与えているからである」ということになる。

しかし、おそらく『旧約外典Ⅱ』の訳者が気づいているように、文法に忠実な試訳に「悔改め」の訳語をそのまま用いると意味が不明瞭になってしまう。それゆえ、もしもメタノイアが人間の行為としての「悔改め」のみを意味するのであれば、誰でも『旧約外典Ⅱ』のように通りの良い日本語訳を作成するであろう。だがわれわれの仮説によれば、メタノイアに感情的変化としての「あわれみ／慰め」の意味が認められるので、「なぜなら、あなたは諸々の罪に対してあわれみ（メタノイア）を与えているからである」と解釈することが可能となる。

さて、解釈を保留していた 12:10 に戻りたい。もしも前述した 12:19 に施した解釈が適切なものであるとするならば、ソロモンの知恵の著者はメタノイアを「あわれみ」

（28）同上、45頁。
（29）Cf. Liddel and Scott, op.cit., p.813.
（30）『旧約外典Ⅱ』、46頁。

の意味に理解していた可能性がある。その場合、問題となっている τόπος を時の概念であるかのように解釈すべきではなく、あわれみの「場（τόπος）」と解釈するのが適切であると思われる。つまり、この「場」が意味しているのは、「あわれみ」の行為を実行するために必要なスペースであり、具体的には、人間の器官の中で感情が揺さぶられる場所を指し示しているに違いない。それゆえ当該箇所は、以下のように改訳するのがよいであろう。

徐々に彼らを裁いて、あなたは彼らにあわれみの場を与えた。彼らの起こりが悪で、邪悪が生来のもので、彼らの想いは永久に変らぬことを知りながら（ソロモン 12:10）。

3．ベン・シラの知恵の考察

『旧約外典Ⅱ』はベン・シラの知恵 17:22c を付加と見なしているので、本文には採用しておらず、「彼の息子、娘らに悔改め（メタノイア）をわかち与えつつ（μερίζων υἱοῖς αὐτοῦ καὶ θυγατράσι μετάνοιαν）[31]」という訳文が注記されている[32]。

このようにメタノイアは「悔改め」と解釈されているが、果たして「悔改めをわかち与え」をどう理解したらよいのだろうか。残念ながら、ここに表現されている内容を理解することはできない。「悔改め」を分かち与えるイメージを捉えることが、どうしても出来ないからである。そのような無理を冒してまで、人間の行為としての「悔改め」の訳語に固執しなければならない理由はないであろう。やはり当該箇所の場合も、メタノイアを「あわれみ」の意と解釈し、以下のように改訳することを提案したい。

彼の息子、娘らにあわれみをわかち与えつつ（ベン・シラ 17:22c）。

次に 44:16 の訳について考察したい。『旧約外典Ⅱ』は当該箇所を、「エノクは主に悦ばれて（天に）移され、後世に対する悔改めの範となった（Ενωχ εὐηρέστησεν κυρίῳ καὶ μετετέθη ὑπόδειγμα μετανοίας ταῖς γενεαῖς）」[33]と訳している。このようにエノクは、悔改めを必要とする罪人であったと解釈されているだけでなく、悔改めた人間の模範であるかのように示されている。しかし旧約聖書の物語を見ても、エノクによる罪の

（31）J.Ziegler (ed.), *Septuaginta*, Vetus Testamentum Graecum auctoritate academiae scientiarum Gottingensis editum vol.XII/2, Sapientia Iesu Filii Sirach, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, ²1980, p.204.
（32）『旧約外典Ⅱ』、413頁。ベン・シラの知恵 17:22c は、L を主とするいくつかの写本による付加である。
（33）同上、189頁。

悔改めを想定することはできないし、ベン・シラの知恵 49:14 もエノクを罪人として扱っていない。それどころか、エノクを神から特別視された存在として描いているように思われる。そこで当該箇所のメタノイアを「慰め」と解釈し、以下のように改訳することを提案したい。

> エノクは主に悦ばれて（天に）移され、後世に対する慰めの痕跡（ὑπόδειγμα）となった（ベン・シラ 44:16）。

第三節　結論

新約諸文書同様、日本語で七十人訳テキストが翻訳される場合も、メタノイアは「悔改め」と解釈されることが多い。しかし、神が「メタノイアを与える」といった表現もあるのだから、一律にメタノイアを個人倫理的な罪の悔改めの意味に解釈するのは無理があると思われる。やはり、メタノイアに込められた多様な意味を認めつつ、文意と文脈に適した訳語を選択するという、ごく当り前の手法を用いる他ない。

従来、あまり強調されてこなかったが、メタノイアは感情の変化を示す語でもある。それに加えて、LXX のもとになるヘブル語 נִחַם の影響を考慮した場合、神が人間（罪人）に授与する恩恵としての「あわれみ」「慰め」といった意味を汲み取ることも可能となる。

今後、メタノイアに見られるこうした側面も考慮に入れつつ、ルカ文書におけるメタノイア理解の考察を課題としたい。